

氏名	上田 泰
ヨミガナ	ウエダ ヤスシ
学位の種類	博士（音楽学）
学位記番号	博音第266号
学位授与年月日	平成28年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 パリ国立音楽院とピアノ科における教育（1841～1889） —制度、レパートリー、美学—

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	土田 英三郎
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	片山 千佳子
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽学部）	大角 欣矢
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽学部）	福中 冬子

（論文内容の要旨）

本論文の目的は、1840年代から80年代に至るパリ国立音楽院ピアノ科における教育の特性を、同機関の教育制度、定期試験のレパートリー、美学思想の3観点から解明することにある。19世紀音楽史において、

コンセルヴァトワール

音楽院は一般にヴァーグナー、リストら進歩的芸術家との対比において、過去の「傑作」の維持機関と位置づけられてきた。こうした前提の下、音楽院には受動的、非創造的、教条主義的といった否定的イメージが与えられてきた。本論文は、同機関のピアノ教育における古典、伝統、進歩といった概念の意義を教育理念（美学思想）と実践（制度、レパートリー、教材）の両面から解明し、それまで自明視されてきた保守と進歩の対立構図では捉えきれない音楽院像の一端を提示する。

第1部「パリ音楽院の制度とピアノ科」では、教育の制度的背景を扱う。前半（第1～5章）では新総則草案が採択される1848年から第二帝政の終焉まで、後半（第6～10章）では第三共和政下でピアノ教授たちの世代交代が進む80年代末までを扱う。ここでは、パリ音楽院の管轄省が承認した総則や総則草案条項、ピアノ科に関する個別の政令・布告に基づき、教育運営、教授の任命、雇用方式、国内外の生徒の受け入れ条件、ピアノ科を取り巻く新しい教育動向（音楽史、民衆合唱教育）の変遷を辿る。

第2部「定期試験のレパートリー」では、ピアノ科の定期試験演奏曲目記録（仏国立古文書館、史料系列AJ 37）に基づいて1840年代～80年代に至る演奏曲目を再構築し、カノンの形成過程を検討する。史料状況と分析法の提示に続き、整理した演奏曲目記録に基づいて変遷過程をジャンル、作曲家の世代別に10年毎に分析した。各年代の特徴的傾向は次の通りである。

1840年代：演奏技法刷新期。フンメルの協奏曲、ソナタが古典的規範とされる一方、同時代のヴィルトゥオーゾ（F. ショパン、S. タールベルク他）の協奏曲、オペラ主題に基づく幻想曲が積極的に導入された。

1850・60年代：作品の評価基準が演奏技法刷新から作曲者の精神的素質（天分、着想）へと移行。オペラ主題に基づく幻想曲は次第に排除され、ソナタ（特にベートーヴェン）が重視されるようになる。存命作曲家（S. ヘラー、J. シュルホフ）についてもソナタが重視された。1860年以降、ショパン作品全般において精神的美点が強調されるようになった。また、歴史的関心からバロック時代の種々の鍵盤作品がレパートリーエクレクティズムに加わり、折衷主義的傾向が助長された。

1870・80年代：カノンの確立期。折衷主義的傾向は次第に弱まり、ジャンル、作曲家のヒエラルキーが明確化される。協奏曲に対するソナタの優位が決定的となる。ベートーヴェン、ヴェーバー、ショパンら少数の「大家」が高度な精神的美の体現者として不動の地位を得た。その一方で、普仏戦争後の新たな規範として同時代のフランス人作曲家（C. サン＝サーンス、E. ギロー他）やリストの作品が導入された。

第3部「フランスの『音楽美学』とピアノ教育——V. クーザンとマルモンテルを中心に——」では、同時代の思想的潮流と世紀後半の曲目選択との関係を明らかにする。前半（第1～5章）では、産業に対する芸術の高尚さを保守しようとするエリートの思潮の中で、ピアノ科を牽引した教授A. マルモンテルが哲学者V. クーザンの^{スピリチュアリズム}唯心論（折衷主義）的美学を受容し、プラトン主義的な理想美の追究を教育目標に掲げていたことを、両者の言説の比較を通して明らかにする。更に、外的条件に対する諸芸術の独立を強調するクーザンの音楽観を更に特殊音楽的側面から強化すべく、同教授がハンスリックによる音楽美の絶対性、器楽の自律性、音楽聴取に関する論点をも受容していたことを指摘する。後半（第6～9章）では、ピアノ科の教育における美学思想の反映について検討する。1860年頃から鍵盤音楽の領域でも実際に真・美の概念に関する議論が行われていたことを指摘したのち、様式とメカニズムの両概念に焦点を当てる。様式概念について、マルモンテルはA. レイハの旋律論に依拠しつつ、演奏の身体的動作であるメカニズムを手段としてピアニストが演奏に反映すべき作品の美的外観としてこれを規定した。両概念の関係は、音楽院で認定／採用されたピアノ練習曲集で強化された。採用されたピアノ教授らの練習曲集6作品の分析を通して、これらの練習曲集が種々の様式の知的理解とメカニズムの合一を目指し、「古典的傑作」の分析的把握に基づく演奏構築を教育のねらいとしていたことを示す。ここから、音楽院におけるピアノ科の教育の背景には、メカニズムの向上から出発して様式美の知的把握力を養い、次いで規範的作曲家の「傑作」の演奏に至って更に高度な普遍的理想美を目指す唯心論的美学があったことを明らかにした。

以上の観察から、19世紀後半のピアノ科における教育の本質は、過去の作品の無批判な維持というよりも、むしろそれらを絶えず思想的に価値づけ、かつ同時代人の作品をも受容しながら普遍的理想を希求する積極的で寛容な姿勢にあった、という結論を導いた。必ずしも旧套墨守を旨とするのではないこうした音楽院のダイナミックな側面は、19世紀音楽史において再評価されるべきである。

（総合審査結果の要旨）

この研究は、19世紀のパリ音楽院ピアノ科における教育姿勢を、(1)音楽院の制度におけるピアノ科の位置づけ、(2)ピアノ科定期試験のレパートリーの変遷に見るカノン（典範）の形成過程、(3)ピアノ科教育の理念的背景としてのフランス美学という三つの観点から、実証的に解明しようとしたものである。対象となる時期は、先行研究のない1840年代以降、影響力のある教授の世代交代があった1880年代末までである。

論文は三つの観点ごとに3部から構成され、それぞれ小規模な博士論文に相当する分量と内容となっている。第1部では、19世紀フランスの政治的・社会的情勢を背景に、音楽院の総則をはじめとする諸規則（実現しなかった草案も含む）や政令が克明に検証され、音楽院の教育運営、教授の選出と任命、雇用方式、国内外男女の生徒数、カリキュラムと授業科目などの変遷が確認される。そこから浮かび上がってくるのは、作曲科を頂点とするヒエラルキーの存在である。第2部では、ピアノ科定期試験のシステムと判明する限り全ての演奏曲目が調査され、取り上げられる作曲家・作品ジャンルの傾向の変遷が明らかにされる。修了コンクールについては先行研究があるが、定期試験の詳細な調査はこの研究が初めてである。ここでは、演奏技法刷新を重要視することから始まり、作曲者の精神的美質の評価、同時代作曲家の取り込み、歴史的関心の拡大、折衷主義などを経て、ジャンルとしてはソナタ、作曲家としてはベートーヴェンらをはじめとする少数の大家が規範化されてゆく経緯が、レパートリー分析によって明らかにされる。第3部は、ピアノ科を牽引し美学的な論考を著したアントワーヌ＝フランソワ・マルモンテルに代表させて、音楽院におけるピアノ教育の背後にあった美学を明らかにしようとしたもの。世紀前半に一世を風靡したヴィクトル・クーザンの折衷主義と唯心論からの影響、世紀後半にフランスに受容されたドイツ語圏のハンスリックの絶対音楽と純粹器楽の自律性の概念の影響が指摘され、後半ではこれらの美学思想がピアノ教育にどのように反映されたかを、音楽院で認定された練習曲を例に、様式とメカニズムの問題から考察される。結論として、19世紀音楽院ピアノ科の教育は、単にアカデミズムで括られるものでもなければ、保守と進歩の単純な二元論で捉えきれぬものでもないこと、「古典」や「伝統」を確立された価値の維持としてではなく、新しい価値の創出として思想的にたえず見直し、同時代作曲家の作品をも取り込みながら、普遍的な理想を追究する積極的な姿勢を示していたことが指摘される。

大変な労力と綿密さで仕上げられた論文である。パリの国立古文書館に保管されている従来顧みられなかった膨大な一次史料の地道な調査と、今日では忘れられた作品や練習曲、教則本を含む多数の楽譜テキストの検証を通して、多くの新事実を指摘し、ピアノ教育の社会的背景、制度的背景、理念的背景をふまえながら、レパートリーの「古典」形成の過程を辿ることができたのは、学術的に大きな成果であり、高い評価にあたいする。単に一つの教育機関の特定の科の歴史にとどまらず、ピアノ音楽史、ピアノ教育史、19世紀フランス音楽史の構築に大きく寄与する研究であり、今後の関連研究に基礎資料を提供するものである。この研究から浮かび上がってきたのは、論文では明示されていないが、ヒエラルキーの頂点にあった作曲科（ローマ大賞と声楽、とりわけオペラ）に対抗するために、純粋器楽の古典を打ち出したピアノ関係者の戦略、という図式である。

一方、論点が多岐にわたるため、残された課題も少なくない。何よりも、規則やレパートリーはデータ化できるので検証しやすいが、それと実際の運用とはまた別であり、規則から得られる情報と運用の実態を同一視はできないこと、規則の裏側を読み解く必要があるということについて、もっと反省的に考えるべきである。パリ音楽院ピアノ科の実態がどれほど一般化できるか、どれほど特殊であるかを明らかにするためには、欲を言えば、他科の状況や他国のコンセルヴァトワールとの比較もほしかったところである。音楽院への保守性に対する批判を自明の前提としているところがあるが、はたして本当にそうだったのか、音楽院の方針やマルモンテルの理論武装に対する社会的な反応や批判も含めて、新聞雑誌など音楽院外の言説をもっと検証すべきではなかったか。保守と革新の拮抗についても、ピアノ演奏にとって何が保守であり進歩であるかのもっと精密な定義が必要である。カノン化されたのが結局、主に独逸のジャンルや大家であったことは、第3部の美学的検証でも十分に説明がついておらず、19世紀フランスの文化史におけるナショナリズムとコスモポリタニズムの葛藤をもふまえて、さらに考察する余地がある。

以上のような問題点はあるが、全体の論述内容はそれらを補ってあまりあるものであり、国際的な水準の優れた研究とすることができる。よって合格とする。